

2015. 10. 20 (火)

## 「寄り添う」という言葉

島村恭則

「寄り添う」という言葉があります。東日本大震災の後から「被災者に寄り添う」とか、もちろん、その前から「寄り添う」という言葉はありましたが、あちこちで「寄り添う」という言葉が使われています。私は「寄り添う」という言葉に非常に違和感がありまして、なぜ違和感があるのかを考えましたので、その話をしたいと思います。

### 宮古島での卒論調査

きょうは10月20日ですよ。今から26年前の1989年10月15日、私は沖縄県の宮古島で卒業論文のための調査を終えて、本土の自分の家に帰っていったのが10月15日だったということ覚えています。その調査というのは何かというと、ちょうど今4年生は卒業論文をやっていると思いますが、民俗学や人類学の研究をするときには、長期間ある場所、研究をする対象になる地域に住み込むというやり方をとります。それで、学部生の4年生の時の7月1日から10月15日まで、ちょうど3か月と15日、沖縄県宮古島の中の狩俣という集落に住み込んでいました。

沖縄の神話やお祭り、儀礼を調査しようということで、沖縄の研究を学部の3年生ぐ

らいから自分のテーマにしていて、4年生になる直前の3月の春休みに、まず予備調査としてその集落の自治会長さんのおうちに行きました。泡盛の一升瓶を持って行き「ここに住みたいので、夏になったら来るので、どこか空き家を紹介してください」とお願いしました。狩俣は、当時、人口912人の小さな集落で、そこは民俗学の宝庫といわれていて、「古代」の儀礼そのものが行われているといわれてきた集落です。学術的にもマスコミからも非常に注目されていた集落なのですが、わたしがそこに住みつく前の15年間は部外者が入れない状態になっていました。というのは、NHKが儀礼に関して非常に無理な取材をして、それ以来よそ者は受け入れないということになっていたのです。が、そこに何も知らないわけではないのですが、とにかく大学生なので行ってみるだけ行ってみようということで、わたしは行ってみたら、別に警戒されることもなく「住んでいいよ」と言われました。

そして7月1日に行きまして、空き家を1か月1万円で借りたわけですよ。それで、着いたその日、その空き家できょうからここに住むのだと思っていたら、夜8時頃に天井から何かバタンと落ちたのです。落ちたものを見ると、長いものかよるよるして

いました。つまりヘビが落ちてきたのです。古い空き家でしたので、これは気持ち悪いなと、それで、集落にはお店が1軒しかなく、コンビニとかではなくて購買店（共同売店）というものなのですが、そこに助けを求めて行きました。レジの横の隅のほうで酒盛りをしている30代の人何人かいて、その中のある人が、「それは大変だね。きょうは、うちに泊まればいい」ということでその人の家に連れていってもらいました。

そして、そのおうちにお邪魔して家族のみなさんに挨拶をしたときに、その家のお父さんが私に、そのヘビは片目だったかどうかと聞くのです。狩俣には集落の背後に深い森があって、そこについて次のような神話があるて信じられています。

狩俣では、太陽の神様を「ンマティダ」といいます。「ンマ」というのはお母さんで、「ティダ」というのは太陽です。それでその「ンマティダ」が、天からその森に降りてきて、住む所を探しました。しばらく行くと羽がぬれたカラスが飛び立つのが見えたので、行ってみるとそこには泉がありました。その井戸は今でもあり、そこが狩俣という集落のはじまりの場所とされているのですが、ンマティダはそこに住むことしました。そうして暮らしていると、ある晩、若い武士が来て、以後、毎晩ンマティダのところに通うようになります。そして、ンマティダはそのうち妊娠します。「いったいあの武士は誰なのだろう」ということで、麻の糸を針に付けて、それを相手の武士の髪の毛のところに刺すわけです。その糸をずっとたどっていくと、先ほど言った井戸にたどり着き、その井戸の中に糸が入っています。見ると、そこにヘビがいて、そのヘビは片目を針で刺されていたとい

う話なのです。片目のヘビ、つまりそれは神様なのです。そして、その生まれた子どもが狩俣の人々の先祖であるというわけです。

太陽であるンマティダと、井戸から出てきたヘビの神様、水の神ですよ、それが結婚し、その子孫が狩俣の人で、わたしが遭遇したヘビが片目だったかどうかということを知られたのは、つまり、そのヘビは、神なのではないかということ、そのお父さんが私に聞いたわけです。このような神話がある村でわたしは3か月半、調査をしたのです。

さて、そのおうちに泊めてもらった翌朝、自治会長さんをお願いして、別のもう少し新しい空き家を紹介していただき、その日からはそちらに引っ越しました。それで、調査が始まります。調査は、こんなふうに行ないました。毎日、だいたい朝の6時半ぐらいに拝所という神を祀る場所に行きますと、神役の、神を祀るおばあさんたちがいて、その人たちは日の出とともに神を祀るので早起きをするわけです。毎日そこで、儀礼とかいろいろなことを学びました。昼間も聞き取りをして、夕方になるとみんな、サトウキビ畑から若者は帰ってくるし、村から町に行って農協などで働いている人たちも、だいたい6～7時になると帰ってきます。その後何をするかという、旧暦8月15日の夜、つまり十五夜満月の夜の綱引きのための大きな綱を青年団と一緒に作ったり、彼らはバスケットボールが好きでしょっちゅうやっていたのですが、そのようなものに付き合ったりしました。それから、それが終わるとだいたい10時ぐらいから、小学校の校庭の、校長先生かが挨拶する朝礼台がありますよね、あの上にみんな乗って車座になって酒を飲むとか、そのような生活をずっとしていました。

それは面白いし、いろいろなことがわかったのですが、いざ論文にしようとするかどうか、つまり、4年生のときに就職活動をせず、宮古島に住んでいる。わたしは研究者になろうと思っていたのですが、論文がきちんと書けなかったら大学院には行けないわけですよね。学ぶことはいいのですが、研究を生産、生み出さなければなりません。8月になっても9月になっても、いろいろな情報はありますがストーリーができません。10月15日まで狩俣にすることにしています。卒論の提出は12月半ばでしたので非常に焦るというような感じがありました。7月1日に住み始めてからあつという間に3か月が経過し、もう10月です。あとはだいたい2週間ちょっとしかないというときに、卒論の提出はしようと思えばできるのですが、内容がきちんとした論文にならないわけです。困って、でもいろいろ試行錯誤していたあるときに、あることに気付いたのです。それは何かという話ですが、その前に、ここにあるのは、私が大学生のときの当時のフィールドノートです。もっとたくさんあるのですが、少しだけ持ってきました。とにかく、いろいろ書いています。カセットテープにも録音していましたが、あれは全然使いませんでした。これが出来上がった卒論で、本物です。原稿用紙にこのように手書きで書いて、写真を貼ったりして3分冊になっています。最後のページに574ページと書いてあるので、半分に割れば400字詰めで二百何十枚というような原稿用紙です。これが卒論なのですが、まあ、これ書けたから良かったのですが、書けなかったらどうしたか。あのとき、大学院に受からないときには、1年間研究生というのをして翌年もう一度受験すればよ

い、また受ければよいということを知らなかったもので、卒論失敗して、大学院受からなかったら、もうずっと宮古島で塾の先生でもして暮らしていこうかなどかと思っていました。それはそれで別に良かったのですが、とにかく研究者になろうと思っていたので、きちんとした論文を書きたいと思っていたときに、あることに気付きました。

狩俣の神様を祀る拝所、拝む所なのですが、そこには線香を立てる香炉が3つあります。その3つある香炉は、それぞれンマティダ、アサティダ、ヤマトカンの3神を象徴しています。「ンマティダ」というのは先ほど言った女神で、「アサティダ」というのは先ほど言ったヘビの神です（「アサ」とはお父さんを意味することばです）。もう一つが「ヤマトカン」。大和とは本土のことですが、琉球時代に大和から漂着した女性がヤマトカンとして祀られていて、合計3つの香炉があります。ところが文献資料をたくさん集めると、先行して調査していた論文がたくさんあるのでそれを見ると、みんな香炉は2つしか書いていないのです。図もあります。大正時代は香炉が2つで、私が目の前で見たのは3つでした。

そこで「なぜ今は3つあるのか」と神役のおばあさんたちに聞いてみました。すると、「これは昔から3つに決まっているのだ。神様のことは絶対に変えてはいけないのだ」と、勝手に人間が変えてはいけないから昔から3つなのだと言います。「昔とは、いつのことでしょうか」と尋ねると、「この村ができたときから。だからあの神話があるでしょう。あのころからだよ」と言います。ところが、先行して調査した報告書など、いろいろな人が来てNHKも来るぐらいですか

ら記録はたくさんありますからそれを見ると、そこには「ンマティダ」というお母さんの神と、あとは「ヤマトカン」しか祀られていなかったということは明らかなのです。「アサティダ」というのはヘビの神でお父さんにあたるわけですが、これは、祀られていなかったはずなのです。

そのことに気付いて、神を祀っている人たちに聞いても、みんな、「絶対変わっているわけがない」と信じ込んでいるわけです。「根立てるまま」という、根っこを立てるといふ言い方があって、そこの村の始まりを「村立て」とか「根立てる」と言いますが、「根立てたまま」なのだという意識がすごく強くて、お祭りのときに歌う神歌にも「根立てたまま」というフレーズが繰り返し出てきます。自分たちがやっていることは、根立てたままです。「ンキャヌママ」、「ンキャ」というのは「昔」という意味なのですが、「ンキャヌママ（昔のまま）」です。ニダティママ（根立てたまま）です」ということを神歌のなかで何回も繰り返します。つまり始原という、始まり、原初のままだということが信じ込まれているわけです。

私は、「香炉の配置は途中で変えられているはずだ。香炉は途中で一つ増やされているはずだ」と考えました。しかし、現在祀っている人たちに聞いても、昔からのままだという。それで、どうしたかということ、その人たちよりも先輩でもう引退している元神役のおばあさんたちに、現役の神役は60代の人たちで、代が変わっていくのでその前の前の前ぐらいの80代ぐらいの人を訪ね歩きました。隠居しているおばあちゃんたちです。わたしがその人たちのところでこの話をすると、「それ、何でわかったんだ？ 実はいま

から25年前にあそこのSさんが香炉を新しく増やしたのだ」といわれました。そのSさんはどんな人かということ、かつて、神役の一員、つまりプリースト（司祭者）の一員ではあったのですが、他の神役と違って、神の声を直接聞くことができるシャーマンだったのです。

わたしは、さっそくSさんを訪ねました。Sさんは、自分のことをわかってくれる人が来たというような感じで非常に歓迎してくれました。どういうことかということ、「アサティダ」というヘビの神様、お父さん、ヘビの神が降りてきて、自分に言ったのだそうです。ヘビの神が「狩俣の人たちは先祖がこのわたしであることはわかっているのに、自分を神として祀っていない。母親のほうだけを祀っているではないか、香炉がないではないか。祀ってほしい、祀ってほしい」とSさんに言うわけです。Sさんは、そのとおりに動かなければ体が苦しいので「アサティダの神様が『祀ってくれ』と言っていますよ」とみんなに言いますが、みんなは「昔からのままではないから駄目だ」と拒絶します。他の神役には、アサティダの声は聞こえませんが、神様のことは「昔のまま」にしなければならぬという信念があるので、Sさんのいうことは受け入れられないわけです。しかし、Sさんも、あきらめるわけにはいきません。神の言う通りにしないと体が苦しいのです。それで、ある日、ついにSさんは、強行突破して、朝早く行って拝所の神棚にアサティダを祀る香炉を置いてしまったのです。

さて、どうなったか。神役たちは驚きます。しかし、一度置かれてしまうと、今度はそれを取り除くことは、怖いからできないの

です。つまり、もしかしたら、本当に神の意志によって置かれたのかもしれないと考えるからです。そうするとどうなるかという、村の外の、町にいるシャーマンに聞きにいきます。町にいるシャーマン3軒に聞いて回って全員3か所ともオッケーと言われたら多分、神の意志だから置いたままで大丈夫だろうということで、聞きに行きました。それで町のシャーマンたちはどのように言ったかという、それぞれ神にお伺いを立てた結果、3人ともいいと言ったのです。それで香炉は、置かれたままとなりました。

そうやって置かれた香炉ですが、置かれてから神役の世代交替が行なわれるとき、その置かれたという事実は伝えられず、忘却されていって、さきほど説明したように、神のことは「昔からのままに決まっているんだ」となっていたのです。つまり、後からの変化というもの、始原の状態に溶け込んでいってしまうわけです。

ただ、こういうことは、たまたまそれに気が付いた人が、いろいろ根掘り葉掘り調べてわかったことです。狩俣の人たちはそのようなしきみがあることは知りません。ですから、もしわたしがこのことを狩俣の人たちに伝えたら、みんなが信じていることがぶち壊しになってしまうので、みなさんには言いませんでした。論文にも書きましたが、論文も現地に送りませんでした。調査倫理や研究倫理というのがあって、研究成果は地元に戻元するのが常識です。わたしも、このとき以外は、すべてそのようにしています。が、このときだけはそのようにしませんでした。そのかわり、現地の方々には、年賀状も手紙も書いて、いまもつきあいがあり、今度も11月23日に宮古島に行くのですが、その論文

だけは、後で活字にはなったのですが、送っていません。やはり混乱をさせてしまうのではないかということで、送りませんでした。

もっとも、実際には、その後どうなったかという、実は、仮に送っても今はまた話が変わってしまって、実は儀礼自体がもう行なわれていません。つまり、祭祀がなくなってしまうのです。また、神話もあまり信じられていません。「自分たちにはそのような神話がありますよ」と外に向かって表現はするようになりましたが、信じるというレベルではもうあまりなく、文化遺産化してしまっているのです。ですから、いま送っても別に「そのようなこともあったんだね」となります。つまり、その香炉のある拝所の建物はもう閉じられて、開かれることがないという状態になっています。

### 「寄り添う」への違和感

さて、以上のような発見があったために、論文の見通しも立って、調査も終わり、10月15日に本土に帰ることになりました。そのときにはものすごく涙が出ました。2時間くらい涙が止まりませんでした。おばあちゃんたちが、借りていた家にやってきて、年金から3,000円とかをのし袋に入れて私にくれるわけです。それは予想外で、こうなるとは自分でも思っていなかったのですが、タオル3本ぐらいで2時間ずっと泣き続けました。その泣くに至るまでの村での話を、きょうはあまりしていないので、泣いたといわれても唐突な感じがするでしょうけれど、とにかくわたしにとってはすごく濃密な3か月半だったので泣くわけです。

わたしにとって、この狩俣での体験がその

後の民俗学者としての人生の原点になっています。狩俣滞在中にお世話になった地元の研究者、郷土史家で佐渡山安公さんという方がおられます。当時、いまの私よりももっと若かった佐渡山さんが、その後、宮古焼の陶芸家になって、また地元の民俗学研究者としても活躍して、いまは60代後半なのですが、彼は、たとえば私が関学生、ゼミ生とかを連れて宮古島に行っても「島村は俺が育てたから」みたいな感じですし、わたしが宮古島で講演をするときにも佐渡山さんが司会をしてわたしを紹介するときには、「この人は私が育てましたから」と、実際にそうなのですが、私はもう彼の子分みたいな感じです。それは地元の研究者との間の関係ですが、狩俣の人たちともそうなのです。

さて、最後に何が言いたいのかというと、大学生のときのわたしの狩俣での原体験、わたしの民俗学の調査とか研究の原体験は狩俣にあるわけですが、その原体験以来、現在まで、わたしには、現地の人に「寄り添う」という意識がないのです。「寄り添う」などおこがましい。当時のわたしにとって、現地の人々こそ先生でした。おばあさんたちも先生、青年団は自分の先輩、先輩にはもみくちやにされますし、とにかく、すべて教わるしかないので相手はもう全部、先生のような感じでした。「寄り添う」というのは、上から目線とまでは言いませんが、明らかにこちら側に確固たるものがあって、そして困っている人に寄り添うというような感じがあります。

学部生のときというのは、まだ何者でもない存在です。相手も、そのようなものとして接してくれます。そこがよいのです。大学生のときというのは、要するに、子どもでもなく、大人でもないような、中間的な、境界的

な時期でしょう。そのころは、何に出会っても、何を見ても、聞いても、それは自分の自己を形成するものになっていきます。でも、何か大学生のうちで確固たるものがあるかのように思ったら、それこそ大二病でしょう。自己形成過程ですから、そのようなときのわたし、大学生のわたしには、自分がだれかに「寄り添う」などという感覚はまったくありませんでしたし、それが原点にあるので、「寄り添う」ということにうさんくささを感じるのです。

いまのみなさんも、人に「寄り添う」という感じはあまり持っていないのではないかと思いますし、持っているべきではないと思います。恐らく大学を卒業して、本当の大人になってしまっていくと、もみくちやにされるという経験はあまりできません。大学生だから「寄り添う」のではないつきあい方ができる。たとえば、留学もそうですね。わたしは、20代の後半に専任講師として韓国の大学で教えていたとき、日本から留学生が来て、同じように日本から来たのですがわたしと彼らはやはり違ってしまいうけです。わたしはもう先生になってしまっている。すると、もみくちやにはされません。ですが、当時韓国の大学に留学に来ていた日本からの学生たちは、韓国人の友達ができ、お互いむき出しの状態で付き合う。むき出しの人間関係です。あのようなときに、自分は韓国人に「寄り添っている」という意識など、絶対に起きていないと思うのです。起きていたらそいつはおかしなやつです。ですから「寄り添う」のではないコミュニケーションを一番できるのは、大学生のときだと思うのです。高校生では今度は子どもみたくになるので、やはり、そのような経験ができるのは大学生の

ときだけなので、ぜひ、簡単に「寄り添う」といってしまう大人にならないためにも、今、いろいろなものに出会って、自己形成の過程にあるというある種の特権というか、今が一番いい時期なので、そのようにしてほしいと思います。

きょうのテーマは、実は「信じるというこ

と」なので、宮古島の人が昔からのとおりだと信じていたという話をしましたが、その宮古島調査の体験をもとに、ちょっと本論と結論が飛躍してはいますが、「寄り添う」についての違和感についてお話をしました。

(社会学部教授)